

## 背中と手

伊波 祥子

あなたは予定日より二週間も早く生まれてきたね。急におなかが痛くなって、まさかと思い、病院へと急ぎ、あれよあれよという間に、あなたはこの世にコロナと生れ落ちた。先生がおぎゃあと泣かすために、背中を ごしごしとさすって、あなたはやつと小さく、ふにゃあと泣いたのを、今でもつい先日のことのように思い出す。生まれたてで紫色の肌をしていたけど、とても愛おしかった。

あなたはおとなしくて、とても育てやすかった。夜泣きどころか昼間もほとんど泣かず、お隣さんが、泣き声がぜんぜん聞こえないけど、本当

に赤ちゃんいるのど、私に尋ねたぐらいだ。あなたは私が高齢で初めて授かった子供だから、とてもとても丁寧に世話したんだよ。うんちのときは濡ティッシュを使わず、必ずお風呂のシャワーでおしりを洗った。夜中でもね。人工ミルクは一切与えず、でないおっぱいを辛抱強く吸わせて完全母乳を目指した。首がすわるまでは絶対にたて抱っこはしなかった。逆にそれが首すわりを遅くしていたのもわからずね。私たちはとにかくあなたを大事に大事に扱った。

いつまでも赤ちゃんだと思っていたのに、いつのまにか首も腰もすわり、ハイハイも上手になって、ぐん、と背も伸びて、初めて買ってあげた青い靴もぴったりになって、それを履いて公園を駆け回るようになった。自分でスプーンを使い、ごはんを食べて、その汚れた食器を台所まで運べるようになった。パパ、ママ、も上手に言えて、自分の名前も言えるようになって、保育園に通い、仲良しのお友達もたくさんできたね。

体はどんどん大きくなっていても、心はまだまだ子供。寝かしつけのおっぱいは、とうの昔に終わっていたけど、背中をかいてあげるのだけは続けていたね。あなたはこれをやるとすんなりと寝入ってくれた。あなたの寝顔をみて私は毎日、幸せをかみしめていたんだよ。

あなたが三歳半のときに、あなたの弟が生まれたね。男の子が欲しいと言っていたから望みどおりだとあなたはとても喜んでいて。

あなたの弟は、おとなしいあなたとは正反対で、とても手のかかる子だった。生まれてきたときの泣き声は、産院をつらぬくほどの大音量で、私やナースたちを驚かせた。あなたはベビーベッドですやすや寝てくれたけど、弟はママの腕の中でしか眠ってくれないだけでなく、小さな物音でもすぐに目を覚ましてはぐずって泣き出したりした。ママ以外は人間じゃないとばかりに人見知りをするし、ベビーカー、歩行器、チャイルドシートは得意のエビゾリでことごとく拒否する始末。私は二人目で子育ての大変さを

味わうことになったのだ。

そんなあわただしい日々の中でも、あなたはおだやかで優しく私たちを見守っていてくれた。必ずしていた寝かしつけの儀式も、忙しい私を気づかってか、はたまた気性の激しい弟を思いやってか、やらなくなってもひとりで寝てくれるようになった。私はとても助かっていたんだよ。

月日は流れ、弟は一才になったとたん、手がかからなくなった。泣きもせずわめきもせず、音楽にあわせて毎日楽しそうに踊っている。私は拍子抜けするも、子供の成長を喜んでいた。

ある日、寝ぐずりもせずベッドに眠った弟の横で、あなたは私の顔を見てこう言った。

「ママ、背中かいかいして」

とてもかわいいたんこ声だった。そうだ、あの子が生まれてから、私、長い間あなたの背中をかいたことがなかったね。私は一年ぶりにあなたの

背中に手をあてた。

私の手のひらよりも少し温かいあなたの背中が、一年前よりも、ひとまわりもふたまわりも大きくなっていったのに驚いた。子供の成長は早いとよく言う。でもこんなに大きくなっていったなんて。気持ち良さそうに目をつぶるあなたをみて、私はとても申し訳ない気持ちになった。

「あのねママ。この毛布、ママの匂いがするから、とーっても大好きなんだ」  
あなたはそう言って毛布にくるまり、嬉しそうに笑った。

毎日、忙しすぎて気がつかないけれど、小さな幸せはきつと、そこらじゅうに転がっているものなんだと思う。そのかけらたちを少しずつでも拾うことができれば、私たちは今以上にすばらしい日々を送れるにちがいない。

(了)